

<子ども発達臨床研究センター総合研究企画（2012 サステナ企画）>

# 「生きづらさ」を超えて

日程 11月2日(金)19時から3日(土)15時30分まで  
会場 北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟（W棟）203

## <企画概要>

A 基調講演 11月2日(金) 19:00~21:00

『「生きづらさ」を超えて』

講演者：栗原彬（立教大学名誉教授）

B シンポジウム I 11月3日(土) 9:30~12:00

『「生きづらさ」を超える学び～教育と福祉が会うとき』

話題提供者：佐藤洋作（NPO 法人 文化学習協同ネットワーク代表）  
朝比奈ミカ（中核地域生活支援センターがじゅまる・センター長）  
竹内常一（国学院大学名誉教授）

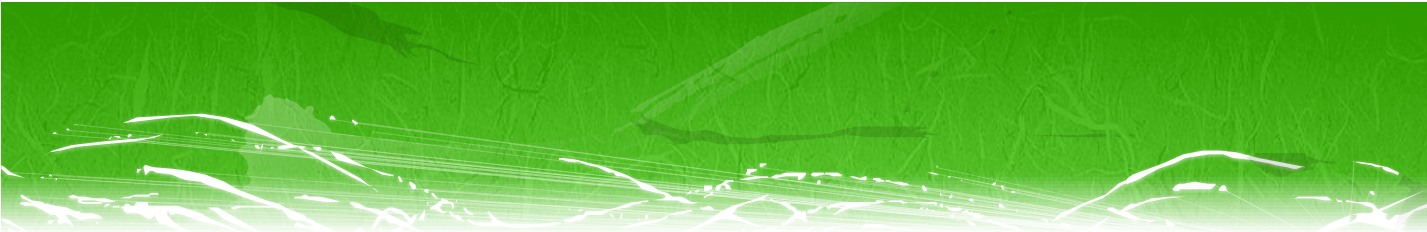
C シンポジウム II 11月3日(土) 13:00~15:30

『「学びの場の再定義～学校と仕事が出会うとき』

話題提供者：井沼淳一郎（大阪府立堺東高等学校）  
大串隆吉（東京都立大学名誉教授）

## 【日程表】

		18:30	19:00	21:00
11月2日(金)		開場	A 基調講演	
		9:30	12:00	13:00
11月3日(土)	B シンポジウム I		C シンポジウム II	
		15:30		



## ＜開催にあたって＞

多くの大人が閉塞感を感じる社会で、子どもが伸び伸びと育つことはできるのでしょうか？2011年3月11日以後、多くの人々の不安感は、人間としての存在のレベルにまで達しました。しかし、あの震災と事故の以前から、人間として生きて存在すること、つまり人間らしい生存が脅かされる事態は広範に出現していました。誰もが懸命にもがいているにも関わらず、姿の見えない巨大な圧力によって押し潰されるかのごとき状況は、職場でも、家庭でも、そして学校でも発生しています。教育の使命が人間の発達の保障にあるのならば、存在の不安定化は、教育の前提条件を掘り崩し、発達の可能性を閉ざす事態と言えるかもしれません。

このような問題意識から、去年は「遊ぶ・学ぶ・働く」と題する総合研究を企画しました。学びの場から遠ざかって(遠ざけられて)しまう子どもや若者の背景にある問題を、人間発達を主導する活動に即して検証してみることが課題でした。そこから浮かび上がってきたのは、「時代が締め出す」(青木省三)ことによって子ども・若者やその家族に「生きづらさ」がもたらされているという事実でした。

同時に、私たちは「締め出された」領域に潜む新たな人間発達の可能性を確認しました。「生きづらさ」に直面せざるを得ない領域は、一方では、存在も意味も不安定化し、確かなものが何もない世界ですが、他方では、締め出した領域を逆に包摂するような小宇宙を生み出す可能性があります。今年のシンポジウムで紹介された実践はいずれも、その具体的な例でした。

そこで、今年総合研究企画では、時代によって締め出され、「生きづらさ」に満ち溢れた領域において生成する人間発達の可能性とその実現条件について考えてみることにしました。「生きづらさ」が貫徹する世界に人間的解放に至る希望の扉を見出すことが、はたして可能なのか？生存を問わねばならない時代において教育の可能性を語る資格は、この間に答えることなしには与えられません。

11月2日には栗原彬先生に基調講演をお願いしました。栗原先生は、存在の次元から政治システムに潜む暴力性を一貫して批判してこられました。政治学・教育学の境界を超える普遍的な問題把握の枠組みを提起して頂けることを確信しております。

11月3日は、「生きづらさを超える学び」と「学びの場の再定義」の二つのシンポジウムを開催します。時代に締め出され「生きづらさ」を抱える人々が、支援の対象として位置づけられるのではなく、自らをそして時代を解放する主人公となるような学びの在り方と、そのような学びに基づく学校の可能性を探ることが課題です。

また、各々のシンポジウムには「教育と福祉が会うとき」と「学校と仕事が会うとき」というサブタイトルが付けられています。教育・福祉・労働は人間らしい生存を保障するための3つの柱です。しかし、それらが分断され、カプセル化されたときに、それらは「締め出す」システムの一要素となってしまいます。このシンポジウムでは、この3つの柱が相互に関連するときに、それらの本来の意義が回復され、人間発達という価値を最優先にする新たな社会や国家(福祉国家)像を描けること、及びそこに埋め込まれるであろう新たな発達概念をも見通せればと願っています。

## <内容>

### A 基調講演

#### 『生きづらさ』を超えて」(仮)

日時：11月2日(金) 19:00~21:00 (開場：18:30)

会場：人文・社会科学総合教育研究棟 W203

講演者：栗原彬 (立教大学名誉教授)

司会：川田学 (北海道大学)

趣旨：「生きづらさ」とは、一人一人の生（生きること）が誰かによって枠づけられ、その意味も決められてしまうことと私たちは考えています。自己決定の及ばない人生を生きることほど「つらい」ことはありませんが、今の時代は多くの人々をそのような状況に置いています。この転倒性を超えるという課題に挑戦することなしに、人間の発達や、それを保障するはずの教育を語ることはできません。栗原彬先生は政治社会学の立場から、水俣や福島の問題と向き合いつつ、一貫してこの問題に取り組んでこられました。この基調講演では、人間存在の根底から現代社会と人々の生のありかたを問われている栗原先生に、転倒した時代を超えるための課題についてお話し頂きます。

## B シンポジウム I

### 『生きづらさ』を超える学び～教育と福祉が会うとき

日時：11月3日(土) 9:30～12:00 (開場：9:00)

会場：人文・社会科学総合教育研究棟 W203

話題提供者：佐藤洋作 (NPO 法人 文化学習協同ネットワーク代表)

朝比奈ミカ (中核地域生活支援センターがじゅまる・センター長)

竹内常一 (国学院大学名誉教授)

コーディネーター：日置真世 (NPO 法人 地域生活支援ネットワークサロン)

松本伊智朗 (北海道大学大学院教育学研究院)

趣旨：教育や福祉の現場では、生きづらさを抱える人たちへ「自立支援」のための模索が続いています。その実践を通じて見えてきたのは、学校や職場そして家庭など、本来一人ひとりを守り支えるはずの場から排除され、孤立し、自分を責める当事者の姿でした。

これまでの自立支援は生きづらさをもつ人たちを支援の対象者として扱い、その課題に着目し展開されることが多かったのですが、現場の模索を通して、当事者は単なる支援の対象ではなく、さまざまな人々との対話と協働の経験によって、問題解決の主人公として、さらには新しい社会を創る担い手として活躍できる手応えも強くなっています。

このシンポジウムでは、社会的に排除され、生きづらさに苦しむ人々が、生きづらさを超えて新しい社会を創造する主体となるような実践の在り方を検討し、その実践の中で進む学びの特質を明らかにしていきます。

## C シンポジウム II

### 「学びの場の再定義～学校と仕事が出会うとき」

日時：11月3日(土) 13:00～15:30

会場：人文・社会科学総合教育研究棟 W203

話題提供者：井沼淳一郎 (大阪府立堺東高等学校)

大串隆吉 (東京都立大学名誉教授)

コーディネーター：横井敏郎 (北海道大学大学院教育学研究院)

上原慎一 (北海道大学大学院教育学研究院)

趣旨：今日、若者の雇用・労働は厳しい環境にある。若者たちはどのように仕事の世界に向き合えばよいのか、学校はいかに彼ら彼女らを仕事の世界に送り出していけばよいのか。ここでは、ドイツとデンマークの高校等をドロップアウトした若者を受け入れている production school (生産学校) と日本の高校での雇用契約書を用いた授業実践の2つをご紹介いただき、若者がエンパワーメントされながら仕事の世界に向かい合っているような教育実践と学校制度とはどのようなものかを議論します。